

# 私見創見 Thursday

八戸市から約1方4600  
離れた南極、昭和基地では  
極夜に入って、冬至を祝うミ  
ッドウィンター祭の時期だ。  
私は2000年11月から01年  
3月まで第42次日本南極観測

隊に、総合研究大学院大学極  
域科学専攻の博士課程の大学  
院生として参加した。目的は  
博士論文のテーマである「南  
極のコケ植物の繁殖」の研究  
であった。自身の南極での生

活と今回のステイホーム期間  
について考えてみると、人と  
の交流、移動が制限されると  
いう点では、共通点があった  
かもしれない。

一般の方のイメージは昭和  
基地や大陸氷床の氷の世界で  
はないだろうか。しかし私の  
場合、昭和基地や氷の世界を  
ほとんど知らずに帰国してい  
る。南極大陸の一部、氷に覆  
われることのない「露岩域」  
という岩と砂の沿岸地域で  
は、夏の約60日間、日中には  
気温が4度程度まで上昇する  
ため、ほんのちよつとの雪解  
け水などを利用し、陸上にお  
ずかにコケ植物が生育してい  
る。南極観測船しらせが昭和  
基地付近に着岸してから、離  
岸するまでの2カ月弱、夏隊  
の私は47日間がテント生活だ  
ったため、昭和基地には4泊

## ステイホームと南極生活

### 情報のありがたさ

しかししていない。  
調査時には海上自衛隊のヘ  
リコプターで食料、水、テン  
ト、観測物資などとともに昭  
和基地から20〜100<sup>キロ</sup>離れ  
た露岩域に降ろされる。もち

ろんほかに人はおらず、ペン  
ギンの数の方が多い。いるの  
は陸上生物担当の2名、国土  
地理院の測地担当1名の3名  
の男性隊員と私の計4人だけ  
であり、約2週間のテント生  
活を送りながら、調査やコケ  
の採取を続けた。外部との連  
絡手段は昭和基地との無線の  
定時交信のみ。調査を終える  
と、天候がよければヘリコプ  
ターの迎いでしらせに戻り、  
翌日また次の露岩域に降り立  
つ。

椅子がある生活に文明を感  
じ、約50名がいた昭和基地は、  
露岩域に比べると大都会のよ  
うだった。そして普段、意識  
することのない情報も、実は  
人との交流の懸け橋になって  
いて、重要だったのだと気づ  
かされた。

現在では当時と大きく異な  
り、昭和基地でもインターネット  
が常時接続され、先日、  
6月10日にはYouTube  
で昭和基地からの生配信もさ  
れていたほどだ。日本の南極  
観測は開始からすでに63年が  
経過しているが、第1次隊の  
隊員たちは、情報の少ない中、  
余暇時間にどのような話をし  
ていたのだろうか。

鮎川 恵理

八戸工業大  
生命環境科学科准教授



あゆかわ・えり 1973  
年東京生まれ。総合研究  
大学院大博士課程修了。  
2004年から八戸工業大で  
勤務。植物生態学が専門  
で、コケ植物の生態や海  
岸植生が主なテーマ。青  
森県環境審議会委員など  
を務める。00〜01年の第  
42次南極観測隊に参加し  
た。

登山経験があつたせいか、  
露岩域での調査生活は電気、  
水道、風呂、トイレ、娯楽が  
なくても快適で、楽しい時間  
を過ごした。しかし、さすが  
にその生活の終盤では、4人  
で話す話題が尽きてきた。唯  
一の外界との連絡手段である  
無線の定時交信では、天気と  
ほかの地域で調査中の隊員の

行動報告しか入らない。  
もちろん日本や世界のニュ  
ースを聞くこともない。6週  
間もその状況が続くと、同じ  
話題が2巡目、3巡目となっ  
て少々飽きていた。ちょうど  
その頃に、最後の調査地、昭  
和基地周辺の露岩域となり、  
私たちはほかの隊員から1カ  
月半も遅れて昭和基地入りし  
た。

椅子がある生活に文明を感  
じ、約50名がいた昭和基地は、  
露岩域に比べると大都会のよ  
うだった。そして普段、意識  
することのない情報も、実は  
人との交流の懸け橋になって  
いて、重要だったのだと気づ  
かされた。  
現在では当時と大きく異な  
り、昭和基地でもインターネット  
が常時接続され、先日、  
6月10日にはYouTube  
で昭和基地からの生配信もさ  
れていたほどだ。日本の南極  
観測は開始からすでに63年が  
経過しているが、第1次隊の  
隊員たちは、情報の少ない中、  
余暇時間にどのような話をし  
ていたのだろうか。  
一方、日本でのステイホー  
ムでは、動画配信サービスで  
映画やドラマを視聴でき、テ  
レビやインターネットから毎  
日、世界の最新情報が入る。  
南極の露岩域で4人、同じ会  
話を2〜3巡させていたこと  
を考えると、せいとくすぎる。  
今回は東京や海外の友人、九  
州の親戚とも、ビデオ通話で  
会話をするという新たな楽し  
みも見つけた。制限も多いコ  
ロナ禍ではあるが、さまざま  
なツールや情報を使って、多  
くの人の交流をより深く楽  
しみたいものである。